



自立活動だより

NO. 12

文責

自立活動支援センター

令和3年12月24日発行

学校の校庭にうっすらと雪が積もり、冬本番を迎えました。

コロナウイルス感染症予防のために、マスクは欠かせないものとなり、マスクをかけていることが当たり前の生活となっています。本校では、透明マスクと不織布マスクを使い分けて授業を行っています。

このマスクは、話し声にながらず影響を与えます。話し声の大きさと声の高さに対する影響です。まず、声の大きさについて、不織布マスクで3dB程度、フェイスシールドで10dB程度小さくなってしまいます。この3～10dBの減少は、今まで聞こえていた音が聞こえなくなります。また、声の高さは、2000～4000Hz付近が小さくなってしまいます。このため、「サ行音」「カ行音」「タ行音」が聞こえにくくなり、こもったような声になります。

そこで、聴覚障がいのある子どもたちと話をする場合は、以下のような配慮が必要となります。

- 1 口元が見えるマスクを着けましょう。今、様々な透明マスクが開発され、販売されています。お持ちでない保護者の方は、是非、ご購入ください。
- 2 リズムやイントネーションは崩さずに、ゆっくりはっきりと話す。
- 3 声の大きさもいつもより大きめの声で話す。

校内でも不織布マスクを着けたまま話している場面を時々見かけます。耳をよく使っているお子さんの場合、不織布マスクを着けたままの会話で問題がないように思われますが、実は聞き逃しや聞き誤りが起こってしまう可能性が高いです。このことは、言葉を育てるという点からもよくありません。聴覚障がいのある幼児児童生徒との会話の際には、口元を見せて話をするように心がけましょう。



ていねいに、ていねいとは

～読話しやすい話し方～

子どもたちは、人工内耳でとてもよく聞き取っているように思いますが、聞き誤りが頻繁に起きています。そこで、聞き誤りを補うためにとても有効な方法が読話です。読話とは、話し手の口の動きを見て何を話しているか読み取る方法です。子どもたちには、しっかり口元を見て話しを聞くように指導しています。



読話しやすい話し方は、次のとおりです。

- 1 句読点を目安に間をおいて話すこと。
- 2 早口にならずに、ゆっくり自然な抑揚をつけて話すこと。
- 3 母音の口形を、しっかり見せるように話すこと。
- 3 語尾を曖昧にしないで話すこと。
- 4 文末までしっかり声を出して話すこと。
- 5 話し手の顔を逆光にしないで話すこと。
- 7 話し手も聞き手の顔を見ながら話すこと。

この読話しやすい話し方は、保護者の方々にも、身に付けていただきたい話し方です。ぜひ、今日から実践してみてください。

人工内耳について2

～人工内耳の仕組み～

人工内耳は、手術で耳の奥（蝸牛）に埋め込む部分（インプラント）と、音をマイクで拾って耳内に埋め込んだ部分へ送る体外部（スピーチプロセッサ）とからなります。体外部は耳掛け式補聴器に似た格好をしているものが主体ですが、近年、耳に掛かず後頭部に取り付けるコイル一体型の体外装置も製品化されています。マイクで集めた音は、音声処理部（スピーチプロセッサ）で電気信号に変換され、その信号がケーブルを通り、送信コイルを介して耳介の後ろに埋め込んだ受信装置へ送られます。送信コイルは磁石で頭皮を介して受信装置と接しています。受信装置に伝わった信号は蝸牛の中に埋め込んだ電極から聴神経を介して脳へ送られ、音として認識されます。この人工内耳の装用によって、個人差はありますが、聴力が劇的に改善し、多くの装用者がささやき声を聞き取ることができるようになります。



スピーチプロセッサ

インプラント

